

世界に広がる絆



多くの観客を呼んだ囃子実演

川越を通して日本の伝統と文化を世界に発信している「川越 style 倶楽部」。昨年の9月7日から17日の間にフランスのストラスブールで行われたヨーロッパフェアに、日本から唯一の文化交流団体として参加しました。このフェアは、ヨーロッパのなかでも大きなもので、さまざまな文化に出会えるイベントです。現地では「東日本大震災での復興支援への感謝の気持ちと元気な日本を伝えたい」と、中台囃子連中による囃子実演や書道家・矢部澄翔さんによるパフォーマンスなどを実施。ヨーロッパ各地から集まった人々とのさらなる交流と絆を深めました。

未来に羽ばたく門出の日

成人の日の1月14日、川越運動公園総合体育館で成人式が行われました。今年の新成人は3,461人。雪が降りしきるなか、色とりどりの着物や真新しいスーツを身にまとった新成人が、銀世界に花を添えました。実行委員の中村明日香さん(寺尾)は「周りの人に元気を分けてあげられるような大人になりたいです」と新たな門出を迎えて目を輝かせていました。



なかむら あすか



新成人でにぎわう会場

ひとまち ふおとこニュース



行って 会って 体験 気になるイベントや人を紹介

小江戸ある寺

ひとまち



細くしなやかな竹で出来た骨組み

竹と和紙で作る和紙(わがみ)を中心に骨組みから作成し、実際に飛ばして伝統の技術を磨く「川越・入間川風の会」。骨組みに適した節の長い竹を求めて自ら取りに行くなど、製作には素材からこだわりを持っていきます。また、風揚げにかける情熱も熱く、季節を問わず安比奈親水公園で風を揚げ、日々腕を磨いています。そんな会の自慢のひとつ

つが「川越 扇風」。扇風は、江戸時代末期から昭和20年代まで、川越を中心に普及していた風で、名前のとおり扇の形をしています。当時は、富士見市と川越市にあった風屋で製造され、最盛期には年間2万個以上が販売されていたとのこと。一時廃れてしまいましたが、風愛好家が昭和47年頃から調査し、作り方・技術を復



空に舞上がる扇風

元しました。同会では「牛若丸」「弁慶」のような基本絵柄に加え、干支やだるまも絵の題材に取り入れるなど、伝統の技術の継承だけでなく、創意工夫を凝らしたさらなる美しい扇風作りに挑戦しています。「扇風は風が強すぎるとよく飛びません。微風くらいが一番です」と会員の裏川一雄さん(上野田町)は強風のなかでも風を巧に操り、空に舞い上がらせ

ながら語ってくれました。また同会は、市内の小学校に風作りや風揚げを教えに行ったりすることもあるとか。「風揚げは親子で一緒に屋外で楽しめる遊びのひとつなので、もっと広まって欲しいですね」と会長の五十嵐健次郎さん(日高市)は風への思いを笑顔で話してくれました。

そんな「川越 扇風」。2月20日(水)まで川越まつり会館で展示され、美しい風たちが来館者を迎えてくれます(要入館料・13日(水)は休館)。

間2万個以上が販売されていたとのこと。一時廃れてしまいましたが、風愛好家が昭和47年頃から調査し、作り方・技術を復

元しました。同会では「牛若丸」「弁慶」のような基本絵柄に加え、干支やだるまも絵の題材に取り入れるなど、伝統の技術の継承だけでなく、創意工夫を凝らしたさらなる美しい扇風作りに挑戦しています。「扇風は風が強すぎるとよく飛びません。微風くらいが一番です」と会員の裏川一雄さん(上野田町)は強風のなかでも風を巧に操り、空に舞い上がらせ

情熱が空を舞う